



伊藤野枝全集 上

學藝書林

伊藤野枝全集■上 卷

著者〓伊藤野枝

発行者〓田村正敬

印刷者〓和田彰三

発行所〓株式会社 學藝書林

東京都中央区八丁堀二の三の五 丁番号一〇四〇

振替〓東京一〇八二一

電話〓五五二・五九〇六〓九

印刷・製本〓東洋印刷

昭和四十五年三月三十一日第一刷発行◎

定価〓一、二〇〇円

落丁・乱丁はお取りかえいたします

伊藤野枝全集／上卷／目次

# 創作

|        |   |     |
|--------|---|-----|
| 雜      | 音 | セ   |
| 動      | 揺 | 三   |
| 惑      | い | 二〇六 |
| 惑      | い | 二二六 |
| 乞食の名譽  |   | 二五五 |
| 転機     |   | 二八三 |
| 白痴の母   |   | 三三三 |
| 或る男の墮落 |   | 三四七 |
| 火つけ彦七  |   | 三六九 |
| わがまま   |   | 三八九 |

出 奔……………四二

## 解 説

伊藤野枝小伝……………井手文子…四七

## 解説対談

自分に生きた人……………瀬戸内晴美…四八  
秋山 清……………四八

年 譜……………四六

装 幀 析折久美子

## 凡 例

- 一、この全集に収録されている文章は、原文は旧仮名遣い、旧漢字であるが、読者の便宜をはかるため、なるべく、新仮名遣い、当用漢字に統一した。ただし、文学作品であるため、かなり自由な表現法がしてあるし、当用漢字にしては、意味が曖昧になるものは、もとのままとした。
- 一、原文におけるあきらかな誤字、脱字は訂正した。

伊藤野枝全集■上卷





## 雑音

### 「雑音」を書くについて

面倒な前置きなどはやめにしようと思ひながら、やはり読んで頂く方に、またこの私の今書こうとする人の前に、ぜひいわねばすまないことがあるような気がしますので、本題に入る前にいっておきたいのです。

明治四十四年の九月に「青鞥」という雑誌が若い少数の婦人の手に創刊されて、今日まで足掛六年満四年以上の時がたちました。私の手に経営することになってからでさえ、もう満一カ年はたちました。雑誌はかなりな号数を重ねて、最初からではかなりな進歩のあととたしかに見えるようになりました。けれども、今日までのすぎた日をかえりみますと、ここまでに育てて来た内部の人々はもちろん、他の関係者の受けた圧迫や苦痛は、とても私の幼稚な筆では書けそうにもありません。私達の歩みは最初の第一歩は習俗に対する反抗でした。そして私たち自身では、それはかなりしっかりした理論を持っていました。けれども、それは世間の人々にとっては何んでもありませんでした。雑誌をのぞいて何彼という人はまだしも、ただ無責任な人から人へ伝わる誤謬の多い噂をまに受けて、「新らしい女」という流行語が生まれ、五色の酒、マント、吉原ゆき、男女間のふしだらな交際、といったような乱暴きわまる、外見的な奇を衒うような女のみと早呑みこみをする人の方が多くなってきました。そして青鞥社は「女梁山泊」というのはなはだ有難い名称までも

頂戴するようになりました。

私が青鞥社に入社するようになり、内部で平塚氏の手伝いをするようになったのは、大正二年の十一月からでした。ちょうど吉原ゆきが問題となって、ようやく人達の行動が世間から注目されるようになってきた頃でした。私はまだ学校を出たばかりの、すべてのことについて無智な十八の年でした。そうして今日まで私はずっと青鞥の編集に従事して、外部から受けた種々な影響はいいにつけ悪いにつけ、すべて私には直接の苦痛であり、よろこびでありました。そうしてまた、内部の人々の一人々々の異なった生活についても、私は世間に発表されていることとはずっと違った方面にその真相を見出しました。私はその自分の目に映じただけの人達の生活ぶりを発表するだけでも、青鞥社というものがどんなものかという事をたしかめるたしには確かになると何時も思うのでした。

けれども、それはなかなか実行の出来ることではありませんでした。私はただ考えるだけでした。けれどもそれを書きたい心持は、何時までもたつても決して消えはしませんでした。この頃ではそうした世間に発表された誤謬を解くというような意味でなく、もっと強い意志を加えてきました。私はそれを自伝を書くと同じような心持で、ただ自分の大事な記録として書きたいという風に考えてきました。そうして機会が来て今度それを発表することにしました。けれども、これは私の純な気持から、ただ「ありのまま」を書くつもりです。私以外の他人の生活を書くにあたっても、私の良心が許すかぎり正直にかざりなく書きたいと思っています。

で、私のこれを書くについてのいろいろな野心、即ち、青鞥社の誤解をとききたいとか、または内部の人々

の生活を弁護するというような、そんな心持は動機ではありませんが、私はそれを頭において書くのは自分にとってあんまりいいことではございませんので、これはすっかり捨ててしまいました。私はただ、事実の記述という平坦な心持でこれを書きたいのです。これだけの私の心持を読者に断つて理解して頂けば、私は安心して本題に入ることが出来るのです。

一

金曜日の研究会から二三日おいて私は、明子の書齋を訪ねた。その日は哥津子（小林）に会える日であった。「青鞥」の年末号の編集と一緒にしようという約束だった。

明子の書齋にはまだ誰の姿も見えなかった。私を見ると明子は優しく微笑みかけて、

「いらっしゃい、この間の帰りは遅くなって寒かったでしょう。」

と三畳の室に私の方に火鉢をおしやりながら静かな声で話しかけるのであった。私は小さく「いいえ」と答えながら、

「哥津ちゃんはまだお見えになりませんか。」

と初めてはいったその小さな丸窓の室を見廻しながら、本箱の中に詰められた書籍の背文字を読むのであった。

9 雑 音  
「ええまだ。ダンテは分りますか。この次ぎまでにね、林町の物集さんがあの本が不用になっているはずですからね、行って借りていらっしゃい。処はね、千駄木の大観音をご存じ？ ええ、あすこの前を行って

ね——」

傍の万年筆をとりあげて地図を書き示しながら位置を教えて、

「本当に、行つてらっしゃい、本がなくっちゃね。」

「ええありがとう。」

私はそれだけいうのがやっとであつた。これから歩き出そうとする私を導いてくれるのは、明子の手より他にはなかつた。明子もまた、最近にすべての係累を捨ててただ自分の道に進んでゆこうとする若い私のために、最もいい道を開いてやろうとする温かい親切な心持を私に投げかけることを忘れなかつた。私にとつてはこの明子の同情は何よりも力強い喜びであつた。

「私は、この人のこの親切を、この同情を忘れてはならない。私はこの人のためにはどんな苦しみも辞してはならない。」

私はそうした幼稚な感激で一杯になつた。

「今日は、紅吉も来るかも知れません。それに晩には、西崎さんと、小笠原さんがいらっしゃるはずです。」  
「まあ左様ですか。では随分賑かですね。紅吉さんは、私が以前図書館で会っていた時とはずいぶんお変わりになりましたよ。」

そういつて私は、一昨年あたり根岸の叔父の家から上野の図書館に、夏休みの間毎日のように通つた時、何時も一緒になる紅吉と呼ばれている一枝と、無言のままに両方とも意地をはって歩きつこをした、その時分、あの膨大な体をもつた紅吉と今日のような親しい交渉が始まろうとは思わなかつた。二人は図書館以外

でも、同じ根岸に住んでいたのでもちよい顔を合わせた。けれども、もちろん言葉をかわすことがあろうなどとは思ひもよらなかった。

「あの方があらう紫矢紺の単衣に白地の帯を下の方にお太鼓に結んで、あの大きな体に申訳のように肩上げを上げていたのを、本当におかしいと思って見ていました。それで、その格好で道を歩きながら、何時でも歌っているでしょう。ずいぶん妙な人だと思いましたわ。絵を描く方だということは図書館でわかりましたの。何時でもあの方は本を読まないでよくスケッチブックを拡げていましたもの。あの方の叔父様やお父様が画家として名高い方だということも、その頃から分っていました。あの方の今のお住居は以前私の叔父の住居だった事もあるのです。」

「そうですか、でも紅吉がお太鼓になんか帯を締めていたことがあるのですかねえ。」

と明子は可笑しそうに笑ったが、

「じゃそろそろ仕事を始めましょうね。原稿は大抵そろっていますから頁数をきめましょう。この社の原稿紙三枚で一頁になるのですから、そのつもりで数えてくださいね。」

教えられた通りに、私は一枚々々数えていった。広い邸内はひっそりして、縁側においた籠の中に入れていた小さな白鳩が喉をならす音がなごやかに四辺に散る。後の室にかけられたオランダ時計がカチカチ時をささむ。静かだ。本当に静かだ。明子はうつむいて原稿紙にペンを走らしている。

## 二

小刻みな下駄の音が門の前で止まったと思う間もなく、くぐり戸があいて、けたたましいベルの音がする。

「哥津ちゃんかしら。」

私がそうかしらと考えて、数える手をやめて耳をそばだてていると、すぐ隣り合った内玄関で案内を乞う声が出た。

「哥津ちゃんですよ。」

と明子はペンをおいてそこの敷蒲団をなおした。

「御免下さい、今日は。」

案内されて上がつてくると、その障子をあけて淀みのない朗かな調子で声をかけながらはいって来たのはやはり哥津子だった。スラリと長い体をしなやかに折って坐りながら、格好のいい銀杏返しに結った頭をかしげて明子と挨拶をかわしてから、今度は私と初対面の簡単な挨拶を交わした。

「もっと早く伺おうと思ったのですけれど、他にまわるところがあったものですからつい遅くなりましたの。もうお始めになつてゐるの。目次やなんかお書きになつて？　そう、じゃ私が書くわ。」

明るい軽い調子で話す哥津子が見えてから、急に室は賑やかに、のびやかになった。

「野枝さんって、私もっと若い人かと思つた。こうやって見ると二十二三には見えるわ。もっとも、着物のじみなせいかもしれないけれど。平塚さん、今日Kは来ないの、そう、研究会は誰と誰？　秦さん、へえ、

あの人がそう。」

「秦さんは、今度モオパッサンを訳してくれるはずなのよ。哥津ちゃんは今度の水曜日には出られる。あなたのも予告だけでなかなか出来ないのね。今度は何か書けて？」

「ええ、だけどずいぶんつまらないものよ。私、小説は初めてですもの、何だか駄目よ。」

「でもまあ見せてごらんさいよ。」

「ええ。」

哥津子は派手な模様のついたメリンスの風呂敷の中から原稿を出して明子の前においた。私は明子と哥津子の隔てのない会話を聞きながら、そのまゝに哥津子の書いた「お夏のなげき」という戯曲のくさりを思い浮かべていた。

静かな通りに突然ソプラノで歌う声がした。

「あ、紅吉が来たわ。」

と哥津子が一番に耳をそばだてた。明子は静かに微笑んだ。

三人の笑顔に迎えられて紅吉はいって来た。

音

「編集ですか、手伝いしましょうか。だけど、私はもう社員じゃないからいけないですね。」

坐るとすぐ、原稿紙とペンを持ちながら、あわててそれを下において三人の顔を見まわすのであった。

雑

「あのね、今月号の批評よみましたか。カットがはめてありました、プリミティブだって。ね、どれがいい

と思います？ あなたの詩に使ったカットね、野枝さん、あれはね、特別にあなたのあの詩のために私が描



いたんですよ、南国情調が出ているでしょう。ねえ、哥津ちゃん、本当にあの詩のために描いたんですね。」

「ありがとう、あんなつまらない詩のために、すみません。平塚さんからも伺いましたの。」

「あの平塚さん、話したのですか。だけど全くいいでしょう。」

「ええ、私の詩には過ぎる位です、本当に。」

「哥津ちゃんはどう思います。」

「いやな紅吉、私あの時、ちゃんとほめてあげていたじゃないの。」

「そうそうすみません。」

と本気に可愛らしく頭を下げる紅吉の大きな体を見ながら、哥津子と私は心からおかしがるのであった。

明子は軽く笑いながら、若い三人の対話から離れて哥津子の原稿を読んでいった。鋭い紅吉は、明子の熱心に原稿に目を通しているのを見ると、すぐ立ち上がりかけた。

「今日は邪魔になりますからもう帰ります。野枝さん、今度私の家に遊びにいらっしやい。」

「今来たばかりのくせに何だってもう帰るの？」

「だって編集の邪魔になるじゃありませんか。それに私はもう退社したのに、ここにいとひよっと他人が来ると誤解されるから。」

と真顔に答える紅吉の顔を私は呆れてながめた。